

勝林寺々報



弥陀成仏のこのかたは
今に十劫をへたまえり
法身の光輪きわもなく
世の盲冥を照すなり

如来さまが

このわたくしの親南無阿弥陀仏となつてくだ
さつて

それ以来今にいたるまで
十劫という長い時を経過していただきました。

その間たえまなく
阿弥陀様の大きいなるみ光は

くまなく
衆生をたくしの

深い闇を照しつとけてくださいます。

「親が親になる」。

子どもを産めばそれでだれでも親ですが、産ん
だその子の「親になる」ということはとても大変
なことです。

産みつばなしで、この子をわが子として育てな
いような親が若しあつたとしたら、その人はとて
も「この子の親」とはよべないでしょう。

産んだこの子を、はぐくみ育てるなかで、その
たゆみない苦勞のなかで親も「親になる」のこは
いでしょいか。

真実というものも、もつとも真実に遠いものを
真実化してゆくところに真実とよばれるぬうちが
あるのです。

如来さまも、如来さまからいちはん遠い闇の世
の衆生に、いのちをかけてかかわつてくださるな

かて真実の如来さまとなつてくださるのです。

阿弥陀如来さまは「若不生者不取正覺」(もしあなたをこの親の國に生まれさせることができないなら わたしはあなたの親とはよべれません)という願い(本願)をもつてこの私にかかわることのなかで「私の真実の親南無阿弥陀仏」となつてくださったのです。

それ以来十劫。

「十劫」というのは、「劫」はカルバといつて長い長い時間をよぶインドのことば。

それ以来長い長い間今日のいまにいたるまでたえまなくいつもいつも(無量壽)、どこでも限りなく(無量光)照しつとけてくださるのです。

この浅間しい私こそ、「いつでもはなさないよ」「どこでもだいてるよ」とかかわつてくださる如来さまだから「阿弥陀さま」とおよび申すのです。

十方微塵世界の

念仏の衆生をみそなわし

撰取して捨てざれば

阿弥陀と名づけたてまつる(「阿弥陀経和讃」)

親さまはみずから「撰取」という字の横に次のようにふり仮名をつけられます

ヒトタビ取りテ長クステヌナリ。撰ハモノノ逃グルヲオワエトルナリ。撰ハオサメトル、取ハムカエトル。

葬儀

一月十一日

幕坂 中川 敬太郎 様

一月十二日

横見 横山 精一 様

光のなかで おめでと



「新年明けましておめでとようございます」とお兄ちゃんにあいさつしたら、「あほ。なにがおめでとや。お兄ちゃんほこれから就職戦線ちうてたたいやで。おめでとやなんてゆう長なこと言うたらへんのや」としかられました。

「二十七にもなつてもたんや。まだ独身の新年ですわね。おめでとやなんもないわ」とおねえちゃんです。

「おめでとや明子。元気で十歳にならほつたんやなあ。うそみたいや。おめでとや。」と涙をこぼしておかあちゃんほきちんと私にあいさつしてくれました。

七十五歳のおばあちゃんほ「明子、ようまあおきゆうなつてくれはつたんやねえ。ほんとかしこうなつて。有難とや、おばあちゃんもつたいないくらいや。明子とやちやんとおかあちゃんも兄ちゃんもねえちやんと、みんな一諸に住まわせてもろうて。明子、もつたいないこつちや。ナンマンダブ、マンマンダブ。如来さまんところでみんな一諸にくらせてなあ」

牛の飲んだ水は 乳となり
まむしの飲んだ水は 毒になる

まむしはいくらきれいな水があつた飲んでも、いらいらとのどを濁きもおさまらないので、不平ばかりが出てくるのでしよう。

牛は濁つた水を飲んでも、ゆつくりゆつくり味わいながら飲んで、もつたいないと飲んでみんな乳にしてしまふのです。

「明子、もつたいないこつちや。如来さまのところでみんな一諸にくらせてなあ。」

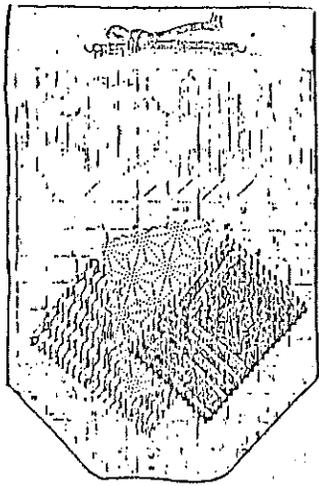
如来さまの光のなかで、この一年も、「おめでとや」すこさせていたきたいものです。

(勝林寺テレホン法話)

二月のこよみ

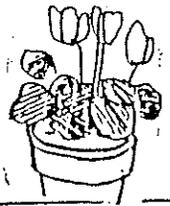
- 二日 京都瑞泉寺御講
- 三日 金久繁一氏法事
- 六日 ひらかた中西正氏法事
- 七日 永井貞雄氏法事・「十六夜宴」
- 八日 幕坂中川氏法事
- 九日 出石和教化推進協議会
- 十日 代議員会
- 十一日 兵庫教区教化推進協議会
- 十二日 兵庫青年会総会
- 十三日 兵庫教区連節節師修会・「みのりを聞く会」
- 十五日

「めぐみの袋」で



二月の第二日曜日は「ターナの日」です。如来さまの大きな恵みのなかのしあわせを、めぐまれない人々に心いつばい分ちあいましよと始められた運動です。私たちの出し合うわずかな志でも、せめてきれいなところをのせてさし上げましよう。小谷の宮崎幸子様が、すばらしい意匠をこらし丹精こめて沢山つくつてくださった「ターナ袋」「めぐみの袋」です。今年ほこれアフリカへ送ることを集めさせていただきます。ご協力おねがいたします。

私のお念仏



いまごろは一年のうち最も寒い季節です。ちようど太陽さんが地球の南の方「南回帰線」を中心にしていてくださつていて、私達の住む北の方では光も熱も弱くなつていゝのです。あの広大な太陽さんの熱や光でも、少し遠く離れていると北の方の生物は寒さにふるえています。また同じ地球上に住んでいてもまだ寒い地方に住んでいられる方も沢山おられるのです。当り前のことのように思われますが、広大な太陽さんですらすべて平等に照らすというわけにはまいりません。これが限りあるこの世のならないというものでしょうか。

このようなくれは私の心のうきにもあります。不公平なくれも平等に見ているつもりなのですが、実際は、他人が困つたり苦しんでおられるときは、あまりかゝわりたくなくて遠い所から照して見えています。自分に直接関係しそうなことには、すぐに近くから照して見ます。だれをも何をも平等に見たり考えたりすることはなかなか出来ることではありません。すまない浅ましいことばかりの私です。

私の住む地球は一日で一回自転します。地球のまわりの表面の長さが約四万Kで大体一万里といわれております。としますと一日二十四時間で表面は百万Kも走つていゝことになり、一時間で千六百六十七K走ることになり、想像もできない早さですが、引力と空気があるおかげでふり落されることがなく、動いて走つていゝという感じさえもいたしません。そうして地球はさらに一年で太陽さんのまわりを一回まわります。これらはみな当り前のことのようにですが私は不思議な出来事でもあり、何かどこかで人生と深い

関係があるように思えます。大昔の人達は、その出来事の起る理由がわからないうちに、おびえ恐ろしがつて不思議だといつたりしました。ほんとうの「不思議」は、そのことが起る理由やすじ道がわかればわかるほど不思議さが思われるということではないかと思ひます。

いろいろな草や木がその季節になると立派な花を咲かせます。花の咲かない前には、この木にこんな美しく花が咲くなんて想像もできませんが、目には見えないところではすばらしい「つぼみ」は用意されているのです。

私達人間にも心のなかに目に見えない大きな花の「つぼみ」をもつていゝのだと聞いたことがあります。それであるのに私達は、他人の花や隣の花ばかりを見てうらやましがつたりねたみに思つたり、あるいはまたそれらと比較して競つたりうのほれたりうらんだらして、せつかくみごとな花の「つぼみ」をもつていゝも、ほんとの「ほとけの花」を咲かせることはなかなかできないのです。

私のくらしのなかに、ずつと昔から、私をほかにせずにはおかないと働きつゞけていゝくださる如来さまの不思議な気づかされていゝただくには、まず、人の花と競りあつたりねたんだり踏みつけたらばかりしてゐる私の浅間しさを謙虚にかえりみさせていゝことではなからうかと思ひます。

『歎異抄』に「煩惱具足の凡夫、火宅無常の世界は、よろずのことみなもつて「そらごと」「たわごと」、まことあることなきに、たゞ念仏のみぞ「まこと」にておわします」とございすが、私もいまだ一度よくよくかみしめて、少しでも悔のない人生をおくりたいと思ひます。

あさましき ころのなかに 咲きいだす

若くは 彌陀仏の花。



耳したがう

「われ十有五にして学に志し、三十にして立つ、四十にして感わず、五十にして天命を知る、六十にして耳順がう。」

『論語』のこの有名なことばから、人がかぞえて六十一歳になつたことを「耳順の歳」「耳したがう」といふことになつたと申します。

「耳順がう」といふことは、人の話に耳をかたむけて聞くことができること、人のころに心から悦びてあげられることをいふのです。

六十歳をこえてお年寄り老人とよばれるようになったネウチには、人の話をすなおにうんうんとうなづいて聞いてあげられるようにならなければならぬといふのです。

年が寄るほど我が強くなつて、人の話に耳をかたむけるどころか、おのれの主張を人がむしやらにおしつけようとする老人が多いなかで、孔子さまはいま「それは老人らしい老人とはいえないよ、老人のねうちはないのだよ」と教えたくださつていゝようです。

「耳順」「みみしたがう」ことが老人のねうち。

しかしそれは実際にはなかなかむずかしいこととす。子や孫や若いものはなしを今日ひとつずつなにおに聞いてやろうと思ひはしても、聞いていゝるうちにだんだん腹が立ちいらいらして、ついまた自己主張やお説教が出てしまふのが私たちです。

いつたい私たちは、どうすれば「耳したがう」聞く耳をもつたほんとの老人になることができるのでしようか。

親賢さまは「聞」という字に「シンジテキク」

とふり仮名をつけていらつしやます。人の話を開ける身になるには、まずその私が如来さまにすべて聞きとられ信じとられていゝ身とさせていゝことが大切だよと教えてくださつていゝようです。

このがんな我慢な私が、実はそのまま如来さまに聞きとられていゝ身と知らされる信心のなかでこそ、人のころをそのまま聞いてあげられる耳もそだつのではないでしようか。

一月二十三日定例評議員会を開きました。出席二十九名、欠席三名でした。この一年の業務を次のように決めました。

二月十日 出石組仏道連盟の事業として二十年つづけてきた「存徳」のいとなみです。すでに全委員から納めていゝたいです。また、「ダーナ」の日です。

今作はそれは別に勝林寺仏道ではアフリカ創設者のダーナをさせていゝたたくことを決めました。それに一面勝林寺の南無阿弥陀仏のダーナ袋を使わせていゝたたく。

六月十五日 永代経法要へむけてお寺の清掃奉仕を致します。午後一時からです。

七月九日 勝林寺仏道の総会。

八月十八日、十九日 例年通り「ほとけの子どもを育てよう」の仏道スローガンのなかで「勝林寺子ども一泊研修会」を行ないます。

十月二日 仏道連盟近畿ブロック研修会が兵庫教区仏道連盟で開かれます。

これらは仏道連盟の行事ですが、その他仏道との合同行事(養老研修会・國慶会、別修習講座など)も計画されました。

